第３５回エンドール国王杯争奪武術大会・特別予選、アリーナ対ミスター・ハン。

アリーナの戦闘力に驚愕したハンは、ついに彼の最大の技〈拳聖無限拳〉を繰り出した！
文字通り、無限に続く拳打に押されるアリーナ。だが彼女は、巧妙にハンの隙を誘い、腕殺し技〈楔（カイル）〉からの上段蹴りで、逆にハンをノックアウトしてしまう！

しかし、ハンは再び立ち上がる。そして、そのハンは、もはや〈拳聖〉ではなかった！
〈闘神〉と呼ばれたかつての彼のように、容赦のない掌打でアリーナを苦しめるハン。
そして、その〈闘神〉がかつて人を殺した技‥‥〈涅槃掌（ねはんしょう）〉が、ついに放たれた！
「飛んで行け！涅槃（ニルヴァーナ）へっ！」

〈涅槃掌〉の直撃を受けたアリーナの体が、木の葉のように、宙へ舞い上げられた‥‥！

＊

この物語は、後に「不屈の王女殿下（ハイネス）」と呼ばれる、サントハイム聖王国第一王女、アリーナ・フォン・サントハイム殿下の、熱く激しい闘いの記録である！

熱血格闘系・ドラクエ４二次創作小説

「不屈の王女殿下（ハイネス）」

～エニックス「ドラゴンクエスト４・導かれし者たち」第２章より～

第９話　「その名は〈王（ケーニッヒ）〉」

あさづけ兄貴

その瞬間‥‥
その光景を目の当たりにしたモニカ・ド・エンドールの心中は、如何であったろう。

『私が助けてあげる』
自分と父王の目の前で、そう言ってくれた‥‥

『絶対優勝するから‥‥。約束ね』
そう言って、手を差し出してくれた‥‥

眩しい太陽のような格闘王女（グラップル・プリンセス）。

その彼女が、今、人殺しの技の直撃を受け、宙を舞った‥‥いや、吹き飛ばされた。

「いっ‥‥」
涙と一緒に溢れ出た、モニカの声。それは悲鳴であった。
「いやあああああああああっ！」

モニカの予測した未来。
観客の予測した未来。
観戦していた他の選手たちの、予測した未来。

それは、恐らくは、至って常識的な物であったろう。

そのまま、アリーナが地面に落下する‥‥
それが、万が一頭から落下し、頭を強打するような事があれば、彼女は生きてはいまい。
そして、悪いことに、アリーナの体は、舞い上げられた後、頭から落ち始めていたのである。

アリーナが‥‥死ぬ。
最悪の、そして最も常識的な予測。

しかし‥‥
それには、ただひとつの、そして大きな「計算違い」があった。

彼らが計算に入れていなかったもの。

そう、その予測がそのまま実現するほど、アリーナは常識的な格闘家ではなかったのである！

＊

驚くべき光景であった。

重力に引かれ、地面に激突するのを待つだけに見えたアリーナの体が、突如、翻(ひるがえ)った！
後方に、くるっと一回転！

「よっ、と」
スタッ！

そして、何事もなかったかのように、しっかりと両脚で、着地したのだ！

ウオオオオオ！
闘技場(コロシアム)を、大きなどよめきと歓声が包む！

「ふうっ‥‥」
溜め息をひとつつつくと、少し落とした腰を浮かし、頭の後ろに手を組み、笑うアリーナ。
白い歯がこぼれる。
「へへー」

「おおっ！」
「ああっ‥‥！」
思わず叫ぶエンドール王・オーギュスト。
そして、感極まるモニカ‥‥！

「さすがに、ちょーっと痛かったけど」
なぜか、右手を大げさに振り、わざとらしく、痛そうな顔をして見せると、直後、鋭い目つきになり、続けた。
「でも、あなたのダメージは、こんなもんじゃないはずよね‥‥」

目を細め、語気を強める。
「‥‥ミスター・ハン？」

「？」
アリーナの言葉に疑問を持ったラゴスが、視線をアリーナからハンに移し‥‥
「！」

ハンが、苦しんでいた！

左手で右の手首を押さえ、額から脂汗を流しながら、必死に何かに耐えていた‥‥
恐らくは、「痛み」に！

「こ、これは！」
王が驚きの声を上げる！
「これは一体！　あの一瞬に何が起こったと言うのだ！　‥‥ブライ殿!?」

観客も、その異様な光景に、気付き始めていたのだろう。
先ほどまでのどよめきに、疑問と不安がない交ぜになったざわめきが混ざり始める。

「‥‥儂(わし)にも見えませなんだ故、推測することしか出来ませぬが‥‥」
身じろぎひとつせず、王の疑問に答える老人。
アリーナの教育係、地上最強の凍術士(フリーザー)。ブライである。

「あの技は姫様の顎を直撃したはず‥‥にも関わらず、姫様は手を痛がっておられる。ということは‥‥」
「姫様が‥‥あの技を、顎ではなく手で受けた、ということですか？」
隣に座る、若き神官クリフトが、疑問をはさむ。
「そういうことじゃろうな。正確には、手で防いだ、と言うべきか」

あの一瞬。
顎にハンの掌が当たろうとする、その一瞬‥‥

アリーナは、右手を動かし、ハンの掌と自分の顎との間に、右掌を差し入れたのである。
そして、その掌でハンの掌を受け止め、右腕の力と、ハンの掌の勢いも利用し、自分で

上空へと跳んだのだ。
　ハンの攻撃は、アリーナの顎に届いていなかった！

「目に見えぬスピードで、それをやってのける‥‥教育係の儂がこう言うことをいうのも何ですが‥‥正直、姫様の力には舌を巻きますじゃ」
　ブライが、真顔で言う。

　しかし、それでも、まだ、謎は残る。
　技をかわしたアリーナに、全くダメージがないのは分かる。
　が、なぜ、ハンは右手首を痛め、苦しんでいるのだろうか？

　戦闘台（リング）上。
　脂汗を流しながら、しかし口元にかすかな笑みを浮かべ、ハンは言った。
「さすがだな‥‥くっ」
　顔をしかめる。相当に痛いらしい。
「この手を受け止めるだけではなく、飛び際に手首を捻るとはな」

　アリーナは、ハンの掌を受け止め、上空に跳ぶ時、ハンの手首を一瞬つかんで極（き）め、捻っていたのである。
　アリーナにとっては、ハンの掌の威力を殺すための策。
　しかし、それと同時に、ハンにとっては、自らの掌の破壊力で自らの手首を破壊する、恐るべきカウンター攻撃だったのだ！

「なるほどのう‥‥」
　貴賓席（ロイヤルボックス）のブライが独りごちる。

「本当は、手首の関節を外しちゃおうと思ったんだけど」
　余裕の表情で、アリーナは恐ろしいことを言ってのける。
「さすがに余裕なかったわね。これが精いっぱい」

「‥‥言ってくれる」
　言って、ハンは苦笑を浮かべた。
（この右手‥‥この試合中は少なくとも〈涅槃掌〉は撃てぬな）
　これは、声に出さない。

靭帯損傷、関節軟骨断裂‥‥
手首の関節を外す、すなわち脱臼させる事こそ出来なかったものの、アリーナの攻撃は、ハンの右手首に、確実に大きなダメージを与えていたのだ。

ここに来て、アリーナが、ハンに対して圧倒的優位に立った！

そして‥‥
そんなハンに追い打ちをかけるように、再びアリーナが言った。

「でも、〈涅槃掌〉だけじゃないんでしょ？　あなたの技は」

アリーナの眼光は、緩まない。
それは、右手を、右掌を失ったハンであろうとも、決して侮らぬ、全力で戦う‥‥その意思の表われであった。

その一言に、沈みかけたハンの闘志の炎が、再び燃え上がる！

「確かに‥‥」
左手を右手首から離し、両腕をだらりと下げる。
「私にはまだ、戦う術(すべ)も、そしてこの左手も両脚も‥‥残されているのだったな」
上目づかいに、アリーナを見る。
再び激しく立ち上る、漆黒の闘気！

「さっきと、同じ‥‥」
ハンのその姿に恐怖を感じているのだろう。かすかに震える声で、モニカが言った。
「ですな」
短く、ブライが答える。
「あの技を返され、弱まりかけた闘気が‥‥姫様の一言で蘇りおったわい」
苦り切った口調。

アリーナの戦いは、いつもそうだ。
相手に全ての力を出し尽くさせ、そしてそれを凌駕する。
勝利を得るため「だけ」ならば、相手に全力を出させぬ方が圧倒的に安全だし、負担も少ない。
しかし、そうしないところが、アリーナの弱点であり、そしてまた同時に、彼女の格闘

家としての素晴らしさでもあった。
　既に熟知したアリーナの人となりを想い、ブライは一言だけ、付け足した
「‥‥まったく、姫様らしい」

　ハンが、再び、右足をすっと前に出す。
　右腕の上に重ねるように、左腕を前へ。
　そして両掌を、ばっ、と開く！

〈蓮華（れんげ）の構え〉！

「また、あの構え‥‥？」
　観客席のラゴス。
「あの技を‥‥〈涅槃掌〉を、また撃つというのですか？」

「おあああっ！」
　雄叫び一閃、ハンが前に出る！
　その勢いを加えた左の掌が、アリーナの顔面に飛ぶ！
　アリーナが冷静に、右横にかわす！
　それを追い、掌の軌道が曲がるが、それをもスウェイバックでかわし切る！
　そこに、今度は外側から、フックでハンの右掌！

（右を‥‥撃って来た？）
　手首が破壊されたはずの右の攻撃に、一瞬戸惑うアリーナ。
　その戸惑いを、ハンは突いた！

　キュン！
　右の掌の軌道が、下に曲がる！
　狙うはアリーナの頬の下、下顎の側面！
　そして、同時に、素早く引き戻した左掌が、アリーナの右のこめかみを襲う！

　予期せぬ、顔面の左右両側からの、しかも高低差の付いた同時攻撃！

「！」
　正反対方向から同時に迫りくる恐怖が、アリーナの判断力をかき乱す！

「いけない！」
　クリフトが叫ぶ！

「ちいっ！」
　それでも、アリーナは、この二つの掌がヒットすれば自らの身に何が起こるか、直感で悟ったようだ。
　右腕を耳の横に上げると、その体勢で、何と、自分から右にサイドステップし、ハンの左掌に当たりに行ったのだ！
　同時に、左手で、迫りくる右の手首をつかむ！

　ガッ！
　ハンの左掌が、アリーナのガード、つまり右の前腕を叩く。
　ワンテンポ遅れて、右掌がアリーナの顎の横を捕える‥‥が、勢いが完全に死んでいる。

　アリーナが、この恐怖の同時攻撃をしのぎ切った‥‥

　否！
　突如、その体勢から、ハンの右足が前に跳ね上がった！
　ハンの両掌をガードし、結果として動きが止まったアリーナの顔面に向け、電光石火の前蹴り！

　ビュアッ！
　しかし、この蹴りすら空を切った！
　アリーナが、その一瞬、のけぞるようにバックジャンプしていたのだ！
　この一瞬の見切りと反応！

　スタッ！
　やや離れた間合いで、アリーナが着地。
　「はあ、はあ‥‥」
　怒濤の連続攻撃をしのいだアリーナ。さすがに、息が乱れている。

「しのいだ‥‥」
　息詰まる攻防の後、口を開いたのはモニカだ。
「あの最後の蹴り‥‥凄かったですわ」
「確かに、あの蹴りも凄かった。ですが、本当に凄かったのは、その前です」

　答えるのは、いつものブライではなく、クリフトだ。
「うむ」
　ブライが、遅れて相づちを打つ。

「あの、左右同時の掌か？」
「はい」
　王に答え、クリフトが続ける。
「あの上下にずらした掌‥‥ハンは多分、姫様の首を捻ろうとしたのだと思います」
「首を‥‥」
「捻る？」

「そう。こういう具合にです」
　クリフトが、自分の右のこめかみと左の顎の横に掌を当て、押し‥‥
　首を、横に傾(かし)げて見せる。

「人間の首は、こういう、傾げる方向に弱い構造になっています。この方向で、力を入れて捻れば‥‥最悪の場合、頚椎(けいつい)の間の関節が外れます」

　神官学校で人間の身体の構造や機能について深く学んだクリフトだからこそ、この技の狙いをいちはやく看破することができたのだろう。

「恐らく、こうやって‥‥いてて」
　両手に力を込め、さらに深く首を傾げ、そして元に戻す。
「両掌で、姫様の首を一瞬で捻るつもりだったのでしょう」
「もし、それをまともに食らえば‥‥？」
「頚髄(けいずい)‥‥首の神経がやられます。よくて下半身不随、下手をすれば‥‥」
　そこで、うつむく。
　続きは言わない。口にせずとも、自明であるからだ。

　もし、頚髄の上、延髄(えんずい)にある呼吸中枢が損傷すれば、アリーナの呼吸が止まる。
　すなわち、アリーナの命の灯火が消えることとなる。

「なるほど」
　一言だけ答えた。王も、察したらしい。

「先ほどの〈涅槃掌〉も恐ろしい技です。ですが、人体への破壊力という意味では、この

技も決してひけは取らない、と‥‥私は思います」
「むしろ、隙の少なさ、初動の小ささ、読まれにくさ‥‥技の使い勝手としては〈涅槃掌〉よりも上やも知れませぬ」
　クリフトに続けて、ブライが口を挟んだ。
「そして、この技は、一度きりしか使われなんだ〈涅槃掌〉と違い、彼奴が幾度か決め技（フィニッシャー）として使ったもの。その名を‥‥」

「〈太極掌（たいきょくしょう）〉‥‥」
　アリーナが、ぼそっと、その技の名を口にした。

　この世はすべからく「ふたつの正反対の物」の対立と調和により成り立つ、と主張する哲学の一派がある。
　光と闇。炎と氷。男と女。昼と夜。
　それらの本質である「陰」と「陽」、これを彼らは「それぞれの大いなる極」‥‥「太極」と呼ぶ。

　両側から、正反対の軌道を描き、左右から対向して同時に襲い来る掌。
　それを、ミスター・ハンは、その「太極」になぞらえたのであろう。

「やっぱ、見ると聞くじゃ大違いね」
「初見か」
　アリーナの言葉に答え、やや不快そうな顔で、ハンが言う。
（初見で、あのコンビネーションをかわしたというのか）

「そりゃあ、初めて戦うんだから。貴方とは」
　呼吸を整えながら、アリーナが答える。そして言う。
「でも、一度見てしまえば、返し方はわかるわ」
　不敵に笑う。

　対するハンも、同じ笑みを浮かべる。
「ほう」
　そして‥‥

　突如動いた！

「ぬっ！」
　ブライが叫ぶ！

　シュバアッ！
　わずかな踏み込みから、恐るべき速さで、再びハンの両掌が放たれた！

　今度は、他の技からつながず直接、何の工夫もフェイントもなく‥‥
　しかし速い！

　ほぼノーモーションから、いきなり放たれた‥‥この試合最初に見せた突きと同じ、いわば「理論上最速の〈太極掌〉」！
　虚を衝いて仕掛けられた技、しかもこのスピード！
　かわせるか、アリーナ！

　ガッ！
　衝撃音が走る！
「ひっ！」
　思わず目を閉じるモニカ！

　それと同時に、戦闘台（リング）上では、片方の格闘家の身体が、後方に吹き飛んでいた！

　それは‥‥
　アリーナではなく、ミスター・ハン！

　アリーナは、この最速の〈太極掌〉をもかわしたのだ。
　しかも、横や後ろでなく、「前」へ！

　最速の〈太極掌〉がアリーナの顎とこめかみを捉える寸前、彼女はほんのわずかに、しかし力強く、頭を前に動かしたのである。
　そして、両掌の前、ハンの内懐に頭を潜り込ませ、掌をかわすと同時に、ハンの下顎に、頭突きを叩き込んだのだ！

　最速の技には、最速のカウンター。
　ノーモーションには、ノーモーション。

ほんのわずかな動きで、かわしとカウンターを両立させる。
これが、アリーナの結論であった。

「‥‥ふう」
一息つき、アリーナが言う。
「ほらね。足を踏まれてても、これぐらいはできるわ」
言いながら、左足をつま先立ちにして、足首をぐるぐる回す。

「えっ？」
観客席のラゴスは、一瞬、己が耳を疑った。
いや、正確には、アリーナの言っていることを理解するのに、数瞬の間が必要だった。
「足を‥‥踏まれた？」

「‥‥そういうことかよ」
「えっ？」
ブライのつぶやきに、クリフトが聞き返す。
「彼奴め、あの一瞬、姫様の足を‥‥踏みよった」

そうなのだ。
あの最速の〈太極掌〉を放った瞬間、ハンは、さらにアリーナの左足を踏んでいたのだ！

何の工夫もなく、正面から最速の技を放った‥‥そう見せかけたその裏で、実はハンは、アリーナに一瞬の隙を作り出そうと、小技を仕掛けていたのである。

正面からの最速の技。
それに集中し、何とかかわそうとしている相手に、予想もしない「足が踏まれる」という刺激を加える。
相手は、それに気を取られ、隙が出来てしまう。
そして、その隙を最速の〈太極掌〉が襲う！

相手の裏をかいておいて、さらにその裏をかくコンビネーション。
恐るべしはミスター・ハン！

しかし、そのコンビネーションすら、アリーナには通用しない。
ハンのさらに上を、アリーナは行っていたのだ。

＊

吹き飛ばされ、しりもちをついたまま、ハンはアリーナを見ていた。

ミスター・ハン。
冷汗が幾筋も、額から流れている。
蒼白な顔面、大きく見開かれた瞳。
かすかに震えているのか。
あれほど、とめどなく噴出していた黒い闘気が、すっかりしぼんでしまっている。

「恐怖」という感情。
今のハンを捕えていたのは、まさに、それであった。

「拳聖」であった五年間の全てを注ぎ込んだ〈無限拳〉。
「闘神」と呼ばれた頃の恐るべき技〈涅槃掌〉〈太極掌〉。
その全てをかわし、全てを返し、いまだ大きな傷もなく、戦闘台(リングダ)に立つ‥‥
若干十七歳の少女。

強い。
あまりに強すぎる。

それが、世界最強と言われた名格闘家の、正直な感想であった。

あまりに強すぎる‥‥
そう、恐怖に囚われてしまうほどに。

「恐怖を感じる」ことと、「恐怖に囚われる」ことは、天と地ほどに、違う。
恐怖を感じ、その「恐怖を感じている自分の心」を制御できれば‥‥恐怖を乗り越えられれば、人はそれに正面から対峙できる。
ハンも、アリーナも、そうして恐怖を乗り越えて、ここまで戦い続けて来たはずなのだ。

しかし。
恐怖を制御できなければ。恐怖を乗り越えられなければ。
人は「恐怖に囚われて」しまう。
制御できない恐怖は、人の心を蝕む。

運動神経を、判断力を、そして理性を‥‥蝕んでゆく。それが「恐怖」なのだ。

ハンが対戦相手の強さに恐怖したのは、恐らくは初めてであるまい。
しかし、その恐怖に「囚われて」しまったのは、格闘家となって初めてであったのだろう。

（届かぬ、というのか‥‥。勝てぬ、というのか‥‥）
ハンは、煩悶していた。
視界が歪む。
その真ん中に立つ、恐ろしくも美しい金色の影（シルエット）。それもまた、歪んで見える。

（〈無限拳〉も、〈涅槃掌〉も〈太極掌〉も通じぬ‥‥）
影（シルエット）は、動かない。
（もはや、私には何も残されていない）

闘気が、どんどん引いてゆく。

「終わりかのう」
ブライが、ぼそっと言った。
「えっ？」
聞き返したクリフトに、ブライが答える。
「見てみい。彼奴の闘気がどんどんしぼんでおる」

ある程度の実戦経験のあるクリフトには、確かにそれが分かった。そして、それがないエンドール王やモニカにも、少なくともハンが完全に意気消沈していることは見て取れていた。

「もはや、彼奴に戦う気力は残されていないはずじゃ」
ブライは、厳しい顔をして、続けた。
「‥‥ただ‥‥な」
「ただ？」
「姫様が、彼奴の気力を再び戻さぬとも限らん。先ほどみたいにの」
先ほど、アリーナの一言は、〈涅槃掌〉を破られて意気消沈するハンを再び元気づけた。それと同じことが、また起こるかも知れない‥‥
ブライは、そう考えていた。

「いや、姫様のことじゃ、恐らくはそうするのじゃろうな」
　珍しく、ブライは苦笑した。

（じゃが、彼奴はもはや、己の持てるものを出し尽くしたはず、いわば抜け殻‥‥。いくら姫様の言葉があったとて、「抜け殻」では力の出しようがあるまいが‥‥）

＊

「ミスター・ハン‥‥ここで終わるのですか‥‥？」
　険しい目で、ラゴスは戦闘台（リング）を見つめている。
　ラゴスは、ハンと本戦で戦い、決着をつける約束をしていたのだ。
「私との約束を果たさず、ここで‥‥」

「あの闘気が、もう出てない‥‥」
　つまらなそうな顔のビビアン。
「もうダメね、彼」

　サイモンの顔も、真剣だ。
「嫌な展開になって来やがった‥‥。こいつぁ、本当にのっけから番狂わせかも知れねえな」

「ぐふ、ぐふふ‥‥」
　不気味な笑い声を洩らすベロリンマン。その表情は、体毛に隠され、杳（よう）として知れない。

＊

　誰もが。
　会場内の誰もが、ハンにはもう戦う気力が残されていない、と思っていた。

　だが‥‥
　ただひとりだけ、そう思っていない人物がいた。

　その人物は、自分の両掌で、自らの頬を二・三度ぴしゃぴしゃと叩くと、しりもちをついたままのハンに向かって、再びファイティングポーズを取り、こう言ったのだ。
　そう、まさに、ブライの予想通り。

「気合い入れ直さないとね‥‥。ここからの相手は、私の知らない貴方だから」

目の錯覚だろうか。一瞬、びくっ、と、ハンの体が痙攣したように見えた。
アリーナの言葉が、まさに霹靂(へきれき)のごとく、ハンの魂を打ったのである。

ハンは、「闘神」であった頃の技の集大成である〈涅槃掌〉〈太極掌〉、そしてその後の「拳聖」としての到達点である〈無限拳〉を、いずれもアリーナに破られている。
それはすなわち、過去の全ての武術家生活の成果を、アリーナに打ち破られた、ということなのだ。

だからこそ。
全てを出し尽くした彼には、もはや何も残されていない‥‥
ハン自身も、試合を見ていた他の者も、そう思っていた。

だが、アリーナは、そんなハンを「私の知らない貴方」と呼んだ。
そして、なおも、ハンと戦おうとしている。

（私がまだ戦えると、そう思っているというのか‥‥姫君(プリンセス)‥‥）

アリーナの瞳は、あくまでまっすぐに、ハンを見つめている。

（分からぬ‥‥どうやって戦えばいいと言うのだ）

ハンを見下ろすアリーナ。
立ち上がろうとしないハン。

それはあたかも、そのまま、勝者と敗者の関係を象徴しているかのような図であった。

しかし‥‥

ハンは、まだ敗者ではなかったのである！

＊

（姫君（プリンセス）は「ここからの相手は、私の知らない貴方だ」と言った‥‥つまり、ここまでの私のことは全て知っている、ということか）

確かに、アリーナの言う通りであった。
幼少の頃よりハンの大ファンであったアリーナは、当時の数少ないメディア（地元の新聞など）を取り寄せ、それこそむさぼるように、ハンの記事を読んでいた。
「闘神」と呼ばれた全盛期、そして人を殺し、スタイルを変え、「拳聖」と呼ばれていた時代。
そのいずれの時代のハンも、アリーナは知り尽くしていたのだ。

（そんな姫君（プリンセス）が知らない私‥‥か）

少なくとも、デビュー時から五年前までの技、そして五年前から今までの技は、いずれもアリーナには通用しないことは明白だ。
そしてそれは、ハンが格闘家として歩んだ道のりの、その全てではないのか？

（姫君（プリンセス）は、私の全てを知っているはずだ‥‥）

そう思った時である。
ハンの心の中を、強烈な違和感が吹き抜けた！

（いや、違う。全てではない。姫君（プリンセス）は私の「全て」を知らない！）

アリーナは、見た。
ハンの震えが止まった！
「！」

（確かに、姫君（プリンセス）は私の歩みを全て知っているかもしれぬ。だが、それは私の全てではない）
ハンは、思い当たったのだ。
（たとえ、私の今までの歩みが、全て知られていたとしても‥‥）

ハンには、確かに見えた。

己の眼前に、光が広がっている。

その光は、道となり、まっすぐに伸びていた。

それは、精神と肉体の極限にいたハンにのみ見えた、幻覚かも知れない。
しかし、それが幻覚であったとしても――ハンの前に、今や確実に、道はあったのだ。

（私は、いまだ歩みを止めたわけではない。私の道は、まだ途切れてはいない）

己にまだ、歩むべき道がある事を。
己にまだ、「未来」が、いまだ知らぬ自分が残されている事を。
ハンは、自力で悟ったのである。

＊

しりもちをついた、その姿勢のまま。
ハンは、目を伏せ、微笑を見せた。
そして、ぼそっと、言った。
「道が‥‥見える」

ピクッ！
アリーナが一瞬、険しい顔になる。

「あの道の途上に、貴方の知らない私がいるのだろう」

闘技場（コロシアム）が、静まる。

「貴方の知らない私は、恐らく私自身も知らない私だ。そして私は‥‥」

そこで、ハンは、顔を上げた。
険しい〈拳聖〉の顔とも、悪魔のごとき〈闘神〉の顔とも違う、晴れやかな表情が、そこにあった。

「私の知らない私を、知りたい」

ハンの言に、アリーナの口元が緩む。
「私もよ」

それを聞き‥‥
ハンが三たび、立ち上がった！
観客席からは、大きなどよめきと歓声！

＊

「‥‥本当に、ブライ様のおっしゃる通りになってしまいましたね」
苦笑しながら、クリフトが言った。

ブライからのいらえは、ない。
ただ彼は、いつものように苦虫を噛みつぶした顔で、戦闘台（リングダ）を見ていた。

＊

ハンの目には、はっきり見えている。
己の歩むべき、未来へと続く、光の道。

そして、その道に立ちふさがるのは‥‥美しき敵、アリーナ・フォン・サントハイム！

「こんな‥‥気持ちだったのだな」
澄んだ青空のような表情で、ハンは呟いた。
「さっきとはまるで違う。『勝ちたい』と思う気持ちは、こんなにも‥‥狂おしく、熱く」

それはまるで、長い間胸の中で温め続けた愛の告白のように。
ハンは、その想いを口にした。

「‥‥素晴らしいものだったのだな」

ハンは、〈拳聖無限拳〉を破られ、アリーナに勝ちたいと願い、そして〈闘神〉の封印を解いた。
その時の「勝ちたい」心。そして、今の「勝ちたい」心。
しかし、それは、「まるで違う」と、ハンは言う。

確かに、そうなのかも知れない。

あのどす黒い闘気を放っていた〈闘神〉と、今のハンは、まるで別人なのだから。

その、本当の「勝ちたい心」を知ることによって、ハンに変化が起こったのか。
それとも、その逆なのか。
恐らく、ハン本人にしか知り得ない‥‥いや、本人すら知り得ないことであるかも知れない。

構えもとらず、左拳を握り、痛む右手は開いたまま、ハンは続けた。
「ひとつ、使いたい技がある」
「へえ」
ちょっと人を小馬鹿にしたような口調のアリーナ。
「一生使うこともあるまい、と思っていた‥‥人を殺すための技だ」

「人を殺すための技、だと‥‥？」
声を上げたのは、エンドール王であった。

「人を殺すための技、ね‥‥」
エンドール王と同じ反応をしたアリーナに、ハンが言う。
「確かに、私は〈涅槃掌〉で人を殺めた。だが、あの技は『人を殺すための技』ではない」
アリーナは、無言だ。
「『当たったら相手が死ぬかも知れぬ技』と、『最初から人を殺すためだけに放たれる技』とは、違う」
「そして、これから使うのは、その後の方、ってことね」
やっと、アリーナが口を開いた。
口元に笑み。
しかし、目は笑っていない。

「そういうことだ」
ハンもまた、笑みを浮かべた。
邪悪さなど微塵も感じさせない、優しい微笑だった。
「貴方を殺してまで‥‥貴方に勝ちたいのだ。私は」
そして、その表情に似合わぬ、恐ろしい言葉を口にする。
「これを放つ私‥‥それが、貴方の知らぬ、そして私も知らなかった、私だ」

ついにハンは、己の未来に向かう道を、一歩踏み出したのだ。

　それはまた‥‥アリーナが歩む、他者の命を奪うことを厭わぬ、修羅の道でもあった。

　モニカも、王も。
　ブライも、クリフトも。
　何も言えない。

「いいわ。殺す気で来なさい」

　そんなハンに、自分を殺すと宣言した敵に。
　アリーナは、臆せず、まっすぐに答える。
　顔の前に、右拳を掲げる。
　軽く開き‥‥再び、ぐっと握る！

「私も、最高の技でお相手するわ」

　その表情には、満ち溢れる自信！

「あれを出しますね、姫様」
「ちと、早過ぎやせぬかのう。まだ予選じゃろう」
ブライとクリフトには、アリーナの「最高の技」が何なのか、分かったようである。

「あの‥‥あれとおっしゃいますのは‥‥」
モニカがおずおずと訊ねる。
「あ、これは失礼をば‥‥姫様がおっしゃいましたじゃろう。『最高の技』という奴ですじゃ」
「姫様の右拳には、『破壊の王』が宿っているのです」
「破壊の‥‥王？」

「行くぞ」
　ハンが言った。
　構えを取らず、両手をぶらりと下げたまま、心持ち頭を低く下げる。

（なにで来る‥‥？）
　目、耳、皮膚感覚。
　アリーナが、ハンの動きに全神経を集中する。

　ハンは、アリーナの視線を受け止めるかの如く、左手を前に、すっと上げると‥‥

　走った！
　全速で、アリーナめがけ！

「！」

　一瞬意表を突かれたアリーナだったが、冷静に対処する！
　左の拳を、ハンの顔面に叩き込む‥‥

　いや、それを、姿勢をさらに低くしてかわすハン！
　そして、なおもハンは止まらない！

　ガシッ！
　ハンが、アリーナの腰に組みついた！
　両腕をアリーナの腰の後ろに回し、固定する！

「組み付き(タックル)!?」
　ラゴスが、身を乗り出す！
「ハンに、寝技(グラウンド)が!?」

　本来、「タックル」とは、相手に組み付いた後、そのまま引き倒し、そして自分の有利な体勢から寝技に突入するための技術である。
　拳と脚、すなわち打撃技で戦って来たハンが、このように寝技への連携を前提とする組み付き(タックル)を使うなど、ラゴスにも、そしてアリーナにも、予想がつかなかった。

「くうっ！」
　このまま倒されると、圧倒的に不利な体勢となる。
　一瞬でそう判断したアリーナが、この体勢から脱出するため、己の膝でハンの頭に一撃を食らわせようと、左足をわずかに引いた、その時――

　ハンの左手が、わずかに動いた。

　左の人差し指と中指‥‥二本の指を伸ばしたのだ。

　そして、まさにその時。
　アリーナの背筋を、異様な感覚が突き抜けた！

　それは、圧倒的な‥‥そう呼ぶにはあまりに圧倒的な「悪寒」だった！

「刺されるッ！？」
　アリーナは、なぜか、そう感じた。

　幾多の実戦で鍛えたアリーナの直感が、自らの身体に危険信号を送ったのだ。
　そして、それは正しかった！

　アリーナが、自らの「直感」に従い、膝蹴りに行くはずの左足を横に踏み出し、強引に体を左にずらした、その瞬間――
　ハンが左腕を引いたのだ！

　指が！
　伸ばしたハンの指が、凄まじいスピードで、アリーナの背中を襲う！

　ビシュオッ！
　しかし、アリーナの背に突き刺さるはずのハンの指は、アリーナの脇腹をかすめ、通り過ぎていった！

　かわした！

　そして‥‥

「！」
「出る！」
　ブライとクリフトが、同時に声を上げた！

　アリーナが、左足を踏み替える！
　横から前へ！
　大地を、しっかり踏みしめる！

体勢は左前半身！
右腕を引く！
右拳をゆるめ、再び握り直す！

その時――
人々は見た。

アリーナの右拳が、輝いている！
まるで金色の光の粒をまきちらすがごとく！

そして、その光をまとわせたまま‥‥
アリーナは、右拳を、ハンの鳩尾に思い切り突き込んだ！
「うおおおおおおおおっっ！！」

ドキュオオオオン！

およそ拳打には似つかわしくない、甲高い異音が、闘技場に轟いた！
光が、ハンの腹から背に突き抜け、淡い粒となり‥‥消える。

両者、動かないまま――

やがて、ハンが、静かに言った。
「技の名を‥‥聞こうか」
アリーナが答える。
「サントハイム王家武闘術‥‥」
自信に満ちた瞳を、ハンに向ける。
「〈王（ケーニッヒ）〉」

「そうか‥‥」

ハンは、わずかに微笑んだ。

その口角から、血が一筋！

「良き戦いで‥‥あった」
やっと、それだけ言うと。
ハンは‥‥
あの無敵の〈拳聖〉であり、〈闘神〉であったハンは‥‥
アリーナの前にひざまずくように、そのまま、膝から崩れた。
そして、その上体がさらに、前のめりに倒れる。

ブライの。
クリフトの。
エンドール王オーギュストの。
モニカの。
ラゴスの。
ビビアンの。
サイモンの。
ベロリンマンの。
その他全ての観客の。

そして、アリーナの目の前で――

静かに、眠るように。
ハンは戦闘台（リング）に沈んだ。

＊

場内に、アナウンスが響く。
『只今の勝負‥‥勝者、アリーナ・フォン・サントハイム選手！』

「っしゃあっ！！」
最高の笑顔で。
アリーナが叫び、右拳を振り上げた。
勝利を呼んだ、必殺の右拳。

読者諸氏は、覚えておいでだろうか。
昨夜、寝室でアリーナが拳や脚、宙返りなどの練習をしていた時――
最後に、彼女が、一瞬光をまとった右拳を放った光景を。

自らの闘気を込めた拳を、その闘気ごと相手に打ち込む短距離拳打（ショートレンジブロー）。
比類無き破壊力、スピードと汎用性。どれをとっても「必殺技」の名にふさわしい。

常にアリーナと共にあり、アリーナを象徴し続ける「王者の拳」。
アリーナの右拳に宿りし「破壊の王」。
その名は〈王（ケーニッヒ）〉！

＊

ウオオオオオッ！
観客席から、歓声とも怒号ともつかない声が飛んだ！

あるいは、ハンの敗北に対する衝撃か。
あるいは、アリーナの勝利を祝福する声なのか。

「いかがですかな、陛下」
自慢げな口調で、ブライがエンドール王に水を向ける。

「あ、ああ‥‥強い、な」
一瞬反応が遅れた王が、我に返ったように、ぼそっと答える。
凄絶な幕切れに、そして、世界一の格闘家を倒してしまったアリーナの力に、魂を奪われていたのであろう。

「アリーナ姫様‥‥」
モニカは、表情に安堵と喜びを浮かべ、一言だけ言った。

「しかし、あの技‥‥」
クリフトが、真剣な顔をして、言う。
心なしか、顔が青ざめている。
「ん？」

「ハンのあの技ですよ、ブライ様‥‥今になってやっと、恐ろしさが分かりました」
「あの指か？」
「ええ。もしかわせていなければ、確かにハンの言う通り、姫様は命を落としていました」

一瞬の静寂。

「確かに、あれが刺さると痛そうだが‥‥しかし、致命にはなるとは思えぬのだが」
いぶかる王に、真剣にクリフトが答える。
「刺さる場所が問題です。陛下、あの時ハンが狙っていたのは‥‥恐らく」
目を伏せ、再び上げる。
「姫様の腎臓（ニーレ）です」

「ニーレ？」
聞き慣れぬ言葉。モニカが再び聞き返す。
「失礼、エンドール語では、腎臓（ラジン）、というのでしょうか‥‥血液の中の老廃物を、お小水の中に漉し取る働きを持つ臓器です」
「それを、ハンは狙ったというのか？」
「ええ、恐らく」
王の問いに簡単に答え、クリフトはさらに語る。
「腎臓（ニーレ）は左右一対、あの高さの背中に近い場所にあります。そして腎臓には、心臓（ヘルツ）が吐き出す血液の量の、実に２割近くが集まる‥‥」
王もモニカも、息を飲む。
「もし、そこにハンの指が突き刺さったら‥‥！」
「即死することはないでしょう。しかし、場所が場所だけに、出血はそうとう多いはず。そのままでは、そう長くはもたないはずです」

再びの沈黙。

「掛け値なしの殺人技、ということか」
内心冷や汗をかきながら、ブライは呟いた。

＊

「あのミスター・ハンが、一撃で‥‥」
観客席のラゴス。
アリーナの勝利により、本選でハンと戦うという約束は守られず、彼の夢は潰えた。

　しかし、ハンに替わって自らの対戦相手となった彼女の力も、また、彼の望みを満たすのに、充分なものだったのであろう。
「相手にとって不足無し、ということですか‥‥。いいでしょう」
　目を閉じ、口元に笑みを浮かべる。
「このラゴスが、全力でお相手しましょう。王女様（プリンセス）」
　再び開かれた目には、闘志が満ちていた。

「まったく、とんでもない女の子もいたもんね」
　自らのことを棚に上げて、ビビアンが言う。
「まあ、でも関係ないわ‥‥格闘家対策は出来ている。来るなら来るがいいわ」
　格闘家に対し、圧倒的不利と思われる魔道士。
　果たして、彼女の言う「対策」とは？

「『輝く拳』か‥‥ふん」
　鼻を鳴らすサイモン。
「今日ほど、自分が鎧騎士（アーマーナイト）であることを有り難く思ったことはねえな」
　卓越した防御力ゆえ、素手で戦う格闘家がもっとも苦手とする、鎧騎士（アーマーナイト）。
　その能力を自負する彼の言葉には、逆に、彼のアリーナへの畏怖の強さが滲んでいた。

「ぐふ、ぐふふふ‥‥強いんだな、あの王女‥‥」
　不気味な笑いが洩れる。
　謎の異形、ベロリンマン。彼の実力が白日の下に晒される時は、いまだ来ない。

「こ、こいつは‥‥」
　観客席の、別の場所。
　ずれた黒縁のメガネをそのままに、青ざめた顔で、ぼそっとつぶやく、若い男。

　灰色（グレイ）の作業着のようなつなぎに身を包み、銀色の長髪を、無造作にひとくくりに縛っている。
　左腕に巻かれた、「PRESS」と書かれた腕章。

　試合開始前、王城前広場で新聞を売っていた、二人の男を覚えておいでだろうか。
　彼はその片割れ、ロビンソンと呼ばれていた、ツッコミ役の男である。

「こうしちゃいられないぞ！　スクープだーっ！　スクープ！」

ロビンソンは叫ぶと、一目散に観客席の出口めがけて走り出した‥‥。

＊

第３５回エンドール国王杯争奪武術大会、その特別予選は、こうして幕を閉じた。

あまりに衝撃的な結末！

だが。
それは、次なる衝撃の、ほんの序章に過ぎなかったのである。

後に「史上最悪にして史上最高の大会」と呼ばれる、この第３５回大会。
大会中に命を落とした選手、全出場者３３名中、実に１４名。
その真の衝撃と恐怖を、我々はもうすぐ体験することになる――。

（つづく）

＜次回予告＞

必殺の〈王（ケーニッヒ）〉でハンを破り、堂々と本戦に駒を進めたアリーナ。
小さな格闘王女は、ついにその力を世に知らしめたのだ！

そして、やがて闘技場（コロシアム）は、アリーナと並ぶもう一人の主役を‥‥
‥‥血と、闇と、そして鋼の色に染まったその男を、迎えることとなる――。

「不屈の王女殿下（ハイネス）」第 10 話　「黒衣の虐殺者（ジェノサイダー）（前編）」

人々の不安と恐れ、そして陰謀が交錯する中‥‥彼はついに現われる！